

3 ヤマノイモの青かび病を防除する種芋消毒方法

ねらいと成果

2003年ごろからヤマノイモにおいて貯蔵中の種芋が青かび病により腐敗したり、定植後の種芋が腐敗して萌芽しないことがあり、問題となっていた。そこで、種芋消毒用の殺菌剤の効果と消毒後定植までの適切な種芋の保存方法・期間について検討した。

新規登録されたベルコートフロアブルが種芋の青かび病菌に対して高い殺菌作用を示し、その結果、萌芽率の向上と増収にも結びつくことを明らかにした。さらに、ベルコート消毒後、種芋を保湿条件で保存するのが重要で、消毒後、できるだけ速やかに定植するのがよく、遅くても消毒後13日以内に定植することが、増収に結びつくことを明らかにした。

内容

(1) 種芋消毒用殺菌剤の効果比較

切断した種芋に青かび病菌を噴霧した後、薬剤浸漬又は消石灰粉衣した。その後、芋切片をポリ袋（保湿条件）に入れ、室温（約17℃）で定植まで保存した。消毒9日後（定植時）の芋切片の菌そう面積率は、無消毒区で85%、ベンレートT水剤区で50%と菌が生存していた。ベルコートフロアブル区では全く発病がなく、高い殺菌効果が認められた（図1）。7月5日の萌芽率は、ベルコート区では97%と高く萌芽長も長かったが、ベンレートT区で50%、無消毒区で48%と低く、両区では萌芽長も短かった（データ省略）。収量はベルコート区では130kg/aと多かったが、ベンレートT区で61kg/a、無消毒区で65kg/aと少なく、

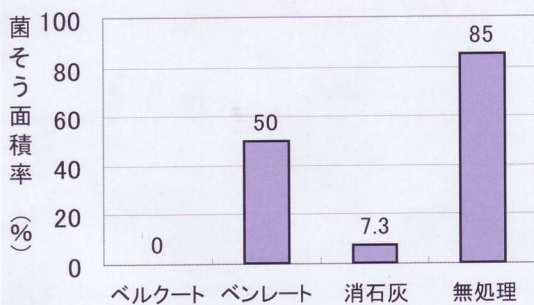


図1 殺菌剤等の種芋消毒効果
(種芋での青かび病菌そう発生程度)

種芋の消毒程度が収量に大きく影響することが明らかとなった（データ省略）。

(2) 消毒後、定植までの種芋保存方法・期間が萌芽率・収量に及ぼす影響

切断種芋に青かび病菌を噴霧した後、ベルコートフロアブルに浸漬し、芋切片をポリ袋内（保湿条件）・室温で5、9、13日間保存、又はコンテナ（乾燥条件）に入れ、室温で5日間保存後、定植した。その結果、6月19日の萌芽率は、定植まで保湿して保存した場合、5日保存区で97%と最も高く、13日では83%とやや低下した。乾燥条件・5日保存区では58%と低く、無消毒・乾燥保存5日区では全く萌芽しておらず、初期生育が遅延した（図2）。収量は、保湿保存区では保存期間5、9、13日区とも130kg/a前後と多く大差はないが、乾燥条件では5日保存の場合でも118kg/aとやや少なく、無消毒では69kg/aとかなり少なかった（データ省略）。これらのことから種芋の早期定植と保湿保存が重要であった。

今後の方針

農家では冬季、種芋を屋外で盛り土の内部に貯蔵しているが、高温、少雨等の場合は、青かび病による腐敗が増加する傾向にある。そこで、貯蔵中における種芋の青かび病対策を講じる必要がある。

前川 和正（北部農技セ・農業部）
（問い合わせ先 電話：079-674-1230）

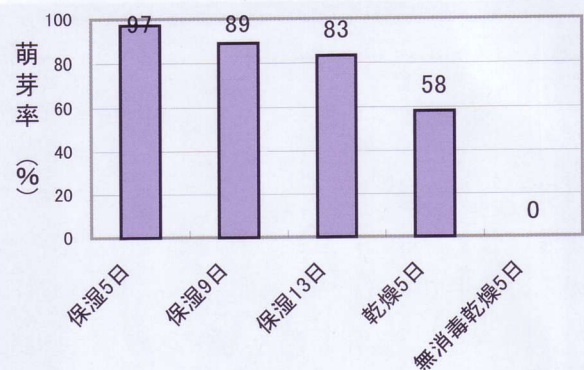


図2 種芋消毒後の保存方法と定植後の萌芽率
(6月19日調査)